

資中筠⁽¹⁾「改革開放」⁽²⁾観

李 燕

目次

はじめに

1、政治経済観

2、教育観

3、愛国観

終わりに

はじめに

2018年7月 WeChat の設定後、筆者が資中筠のピアノ独奏を見た。驚いたのは当時87歳の彼女は、ピアノ演奏以外、現代中国思想の先駆者と「改革開放」思想を引いた人物の一人だと分かった。彼女の発言を通して、その思想と観点の鮮烈さに感銘し、流行っている「中国夢」の勢いを展望することができる。以下は資中筠の近年と最近の講話、彼女への取材で、改革開放40年における彼女の独自の思考、その発展史等を考察してみよう。

1、政治経済観⁽³⁾

(1) 誰が国の主人公？

政治を行う目的は民衆を守る。これは根本の目的である。清朝末期から、富人から百姓までは、政府を仰向けの状態である。独裁の政治で、健全の法治を持たず、内乱と外患で政府の力が弱くなって、民間の力が発展のスペースを得て、思想の活躍と文化の多様化が見られる。

改革開放には私有財産、民営の企業と国営の企業の地位、市場経済に対する認識、そして私有産業の法律の保護などについて、どのように意識するのか。

世界は工業化後、数字経済時代になって、聡明である中国人も一生懸命に追いかけて、結果として、足が現代に入って、頭がまだ現代の前に、そのバランスがどうとるのか。

40年前の改革開放は、180年前の鉄砲と軍艦に開けられた「開放」ではなかった。1世帯2世帯の中国人が自分の内部と外部の力で目を開いて、国際とつながり前進をしつつある。鎖国に戻らないはずである。

全世界の背景の下、改革開放がたくさん豊富の資源を集めたが、傲慢な「強国夢」を戒めよう。

(2) 真実を話す権利は？

中国は古代文明の国であり、輝いた文化を持っていた。農耕文明の歴史が長く、成熟で精緻であり、高水準が表しているが、教科書には、アヘン戦争以来、一連の敗戦があり、いくつの不平等条約が結ばれ、近代史は帝国主義の中国侵略史だと、これは、一方的、不公平な評論である。歴史に対して客観的、真面目に経験教訓をまとめなければならない。

アヘン戦争の記録は少なくとも180年間であったから、改革開放は少なく

とも180年間である。また、中国は30年間で西洋の300年間の道を歩き終わったと言って、これは事実と反するのである。前人の努力と犠牲と貢献は、光輝と悲壯の歴史を作った。

中国は欧米を代表した西洋文化と出会った時、すてに遅れた。大体14、15世紀頃、欧州は中世紀を終えたが、中国は王朝往復の中に定着していて、発達した古代文明は、その時、変革を阻害する重荷になった。こうして近代化と開放と離れられない。国の門を開けなければ根本的な変化が不可能である。「開放」とは発達した国に向けて開放する。180年前にしたことは、40年前も同じことにしたのである。

「文革」は民衆に多大な災難を与えた。これは忘却していけない。似ている言論、思考方式は終止符を打とう。旧時代の信仰と「階級闘争」の体系が崩壊した後、全民衆が承認する新価値体系は、実践と理論と一致していない。10何億の貧苦の民衆が豊かへの生活の欲望とその才能を、一旦その力を釈放したら巨大なエネルギーで巨大なものを創造した。

もう一方、精神的貧困から拝金主義が生まれ、様々な社会の矛盾における事態が緊急化される。人々は平等かつ清廉に憧れ、しかし新しい精神の源泉、道程がまだ発見しなく、記憶あるいは伝説、神話を振り返る反理性、反常識、反ロジックの思想の氾濫を警戒するべきである。

(3) 階層の固定化⁽⁴⁾?

社会には、「富二代」「官二代」は良い資源を占めて、ほかの人の進路に阻害するののか。たくさんの人が未来に自信が失ってしまわないため、活力のある社会が階層の流動性が必要。もしある階層の子々孫々が永遠にその階層にいて、たくさん若者がいくら努力しても、相応しい生活にならないとすれば、その社会は前進しない。

ある社会の腐敗は、教師自身が賄賂を受け、賄賂をする。健康の力は全社

会の腐敗に戦わなければいけない。

現在、たくさんの若者がどのように子どもを教育するかはわからない。さらにある若い夫婦も子どもを取って産むことにしない。なぜならば、どんな教育を子どもに受けさせるのは分からないから。子どもに誠実を教えるのか、また歪んだ物を教えるのか。もし子どもに誠実を教えていたら、将来社会に成り立てるか。また子どもはどのように教師に対応するか、プレゼントを差し上げなければ良いなのか。

このような教育制度のもとで教えていた子どもたちはどんな様子になるか。極端の話、一方、奴隷。もう一方、奸商になるか。一番よく仕事ができる人は、技術者、しかし独立の思考と精神、社会を促進する良い公民にならない。このような教育の危機は現在、存在している。

教育は大きな危機を臨んでいる。これは民族の全体を退化させる。私はかつて言った。現在の教育は私たちの民族の人種を退化させるのではないのか。

2、教育観⁽⁵⁾

(1) 教育の目的は？

教育の目的は真実と真理を教える。物事が分からない人に分からせるのは啓蒙、実は素朴で簡単で高深な道理ではないものである。

教育は、人を育て、人をよくさせ、この社会の良い人を養成することである。社会には、人から成り立て、多数者が文明人であれば、この社会は当然、比較的文明の社会である。もしこの社会を改善しようとすれば、人が改善させる。この社会を破壊しようとすればやはり人によって破壊される。人間は主要な要素と原動力である。

教育はすなわち自然人を社会人に変え、原始人を文明人に変える。簡単に

言えば教育は文明人を養成することである。

100年前に、梁啓超は言った。今日の世界の競争は国民の競争である。あの時代に、中国人が自分の貧弱を痛感し、外国からいじめられて、どこに問題があるか？それは船や鉄砲より弱い国民にある。どんな国民がいるかどんな国である。

国として、他国から尊重されるかどうかは、国土の大きさ、GDPの高さ、人口の多さにもかかわらず、国民の素質と品格が最も重要視される。だから信頼されることは大事であり、真実を話すのも大事である。このような民族は世界から尊重されるのである。

(2) 教育と啓蒙は？

教育は誠に最高の境界であり、理想のため、社会に役に立つ人のため、社会を進歩させるため、今まで、このような教育を追求する人が比較的少数である。

教育の目的は、この社会を改善し、より良い公民を養成して、どんな仕事にしても、たとえ、簡単な職業、複雑の職業、まず社会に対して役に立つ人、道徳と知恵が比較的健全な人。これは基本である。このような基本的道徳の持つ人が多ければ、社会の進歩を絶えず文明の方向に発展させていく。これは私たちの最高の教育目的である。

義務教育は、国外に強制教育とも呼ばれる。いわゆる政府が国民に無料で教育を提供する。公民は必ず教育を受ける。もし子どもが家で学校に行かない場合、非法になる。学資に困難であれば、政府が考慮する。教育は公民の権利、公民の義務になる。

我々の教育が子どもたちに「器量の小さい人、卑劣な人」になる。生徒が自分で手作りのプレゼントを交換するとき、教師がとんでもないと言った。その教師から見れば、買ったプレゼントの価値がある。このような教師がど

んな人材を育成するのか。

(3) 独立の人格と自由の思想は？

実際、現代社会の教育は本来、独立の人格と自由の思想を育てるべきである。私たちはいつも新しいものを創造する人材と言って、今、中国にはこのような人材が足りない。つまり新しい発明と創造をたくさん必要なのである。

新しいものを作り出すのは1日だけ不可能であり、幼児期から育てるのである。なぜ中国の科学が発達しないのか。子どもに小さい時から好奇心を持たせず、この好奇心を育てない。子どもに何も問わせず、大人の話聞かせるだけ。大人は必ず正しい、子どもは必ず間違っていると。このような教育のもとで子どもは新しい精神を創造するのが発揮し難い。

高い境界の教育は、独立の人格を養育し、少なくとも独立の思考の能力があって、自分が正しいかどうかを判断する能力、これも啓蒙である。

啓蒙とは何か。もし教室の中で教師が間違った言動に対して子どもが指摘すれば、それは失礼なのか。しかし事実上、教師としては賞賛をしてあげなければいけない。こうして教師を助けてもらう。もし、学生が本当に間違ったら、どこに間違っているかと分かせて、この状況は中国の教育の中には少ないのである。

一つの文明の進展のプロセス、それは第二次世界大戦以降になって、再び戦争しない。話し合っって問題を解決する。会話することは戦争するより文明的な進歩である。

(4) なぜ教育を受けるか

この動機について様々な目的がある。貧困の農村には保護者は子どもが将来騙されない為、たくさんの例があつて、ある村には一が月一回、市場へ

家の金で買って買い物した子どもが、いつも騙される。もし文字や算数ができれば騙されないと。この事実は確かに教育を受ける動機と目的の一つである。

教育は消費では無い。教育を受けるには公民の基本的人権と権利である。もし学校を消費産業として見るならばそれは間違っている。教育を受ける機会は全員平等であり、平等の起点から公平の競争を保障するのである。

また、競争とは、社会の最も重要な公平的競争の場であるが、なぜならば、人の才能、努力の程度が違う。全ての人に平均主義をしたら、良し悪しはどちらかに区別できなく、人と同様にすることを見れば公平に見えるが、実は不公平である。公平とは平等の条件のもとに、平等から出発し、各人が特徴を発揮する。より良い聡明で、より良く仕事して、よく努力した人はさらに大きな成功を納め、さらに報いをもらおう。

(5) 教育機構を作る目的は？

まず、王朝時代には、貴族と奴隷の区別があって、教育を受けるのは基本的に貴族階級であった。奴隷はその機会がなかった。そのように、教育は統治者が民を操る教育で、多数者が「愚民」で、道理を知る必要がなく、「順民」「臣民」を養成したのである。

資本主義が発達した段階になると、技術労働者が必要、教育の普及が工業化から始まった。非識字者は複雑の機械が操作できないならば、資本家が労働者を教育する必要があった。

社会の発展によって知識がますます得ることにして、教育普及の程度もますます高くなった。改良主義の福祉国家の概念には、教育が政府の責任になった。義務教育の長さは、社会発達の実際の状況に見られる。最初は小学校4年、そして6年、その後9年、現在、発達の国は12年間、高校までである。

資中筠は中国の教育に心配する。今現在の教育方式は、人の創造性と想像力を抹殺するのである。それは教育の本質のものを破壊しているのではないかと。解決するのは思想を開放して、私立の学校教育を作る事にしよう。

または、官を重視し、官本位をする教育の現状を改善しなければ、中国人の人種が退化する。清華大学100周年の祝い活動は、官の級別ごと、話をしていた。

上級の教育機構は、唯一の考察の基準は進学率であって、人々も皆大学に受かる進学率に集中して、高い進学率の手段を選ばず、とにかく、大学に受かればよい。大学に落ちたら、疎外される。

教師の職名と待遇も全部高い進学率に頼って、学習困難の学生に積極的に教える情熱がなくなって無視するって、完全に高い進学率を基準する教育に変わってきた。良い教師は学習困難の学生に関心を持って助けなければいけない。今反対に成績の優秀者、クラスを重点として、関心を持って、これは教育の基本的目的と理念に背反するのである。

(6) 応試教育

応試教育に反対しないが、試験がなければさらに公平性がなくなる。しかし唯一の基準は学生の進学率に集中したら、教育制度がひどく曲がられ、教育の資源が高点数のほうに集中している。例えば、重点学校に入れなければ大学に進学するのが無望である。重点学校の学費が大変高く、ある学校は点数によって入るが、合格ライン以下の1点足りなければ学費を補充しなければならない。

現在、一人っ子を解禁され、しかし一つの家庭には2人の子どもを養うのは不可能である。1人の子どもさえ負担が重すぎて、このような状況が正常ではない。法律には義務教育、それは6年あるいは9年以内に保護者の負担なく楽にするが、幼稚園から学費が高すぎる現状がある。

このような曲がった教育制度は、教育機会の不平等が現れた要素である。それは正常な教育を劣化させる。現在、重点学校を発展することより、普通一般の学校を発展させなければならない。

(7) ピアノ教育⁽⁶⁾

a. ピアノと出会い

資中筠の幼児期には玩具のピアノに興味があつて、学んだ子どもの歌のメロディーを弾いた。師事したピアノの先生は若い有名な女性の先生で、厳しい先生であつた。基本の練習以外に、先生に綺麗な曲も弾かせられていた。このように資中筠のピアノの基礎をしっかりと身につけられた。

b. 真面目に学び

その時はピアノ等級の試験制度がなかった。子どもたちによく学ばせる為には学生音楽会開くことであつた。彼女は劉先生の門下にはよくピアノが上手の一人で、高校卒業時に先生の主催した元で彼女は個人の演奏会が開かれて、貴賓三、四百人がいた。

資中筠が自分の特別な音楽の才能持たず、ただ簡単なメロディーを読めると謙遜に言った。先天にも後天にも足りなく、だから課外の楽しみしかない。

音楽への情熱と彼女と良好の家庭教育によって、彼女が真面目に学んだ。先生についてピアノを毎日放課後、まず1時間のピアノを練習して、そして学校の宿題を完成していた。毎週1回先生の家でピアノの宿題を訂正していただき、そして新たな宿題を持ってくる。長年の間にずっと大切にピアノを練習していた。

c. 将来音楽家になろうと思わず

彼女の母親が彼女に将来音楽家になると思わず、母親の1つの信念があった。これを学んだら真面目に学んでいこうと母親の考えはピアノを買って、先生に頼んで、代償を払った。もし真面目に習わなければ、貴族の娯楽のように気ままに遊んで行けない。なので、母親はピアノの練習と他の宿題と同じように監督する。その時知り合いの子供たちはほぼピアノを買ったが、最後まで学ぶ人は少なかった。

今まで彼女が一度もプロのピアノ演奏家を思わなかった。全て自分の興味で続けてきた。清華大学外国語学部にいる間、彼女がたくさんの音楽活動に参加する為、週末の夜、音楽室でピアノを練習しずっと夜の10時までであった。

d. 定年退職後

66歳になって、正式に定年退職後、彼女はやっとますますピアノを多くの弾く時間があって、になって80歳以降、さらに懸命にて練習して何回もピアノ演奏会を開いて、また CD も制作した。

2012年、彼女は82歳の高齢で、第二回国際非職業ピアノコンクールに参加して、老後年組の第1位に獲得した。彼女が非職業の老人の中に完璧に楽譜を暗記した有数な人であった。千万個の楽譜を一つも間違いなく覚えていた80歳超えた人である。

彼女は中国と西洋科学をたくさん学んで、絶えず学んでいった。教えるのは苦手だが、学ぶこと、学生としては一番幸福である。

社会科学院の米国研究所長を担当、その時は1年間の訪問学者。60何歳の彼女は、いつもカバンを背負って図書館に資料を探しに行行って、一人一人米国の教授を訪問した。相手はみんな40歳代であったが、または偶然の機会で上海音楽学院の指導をもらって、悟った。だから80歳以降にも継続して学ぶ

のはたくさんのごことを身に着けることができる。

3、愛国観⁽⁷⁾

(1) 「民為貴」（人民が最も重要である）

孟子は「民為貴、社稷次之、君為輕」（国家の中で、人民が最も重要であり、土穀の神がこれに次ぎ、君主は軽い）とする。現在、人民共和国になって、さらに民を根本にすべきである。

この民は抽象的の臣民ではなく、生き生きとした一人一人の生存権を持つ人で、愛国はまず愛民にする。愛国は自強、変革、啓蒙、社会の進歩に関係する。

偉大な国は近代的国家で、最大限に各階層各職業の人に平等な権利と自己の幸福を得る国である。国土がどのように広いかと関係ないのである。

民主、自由、平等、公正、法治、文明は核心的の価値観とする。ただ愛国、そして「富強」をさせるのが、どのような「富強」なのか。「富」とは政府の財政と百姓にどちらの「富」なのか。「強」とは軍事以外に文化的、教育のレベルに「強」なのか。

(2) 醜い母親

一つのスローガンは「子どもがどんな醜い母親が嫌がらない」。愛国を例えるが、つまり、この国に問題があれば、改革をして、問題を改善しなければいけない。醜い母親をきれいな母親にしてあげて、それは愛国なのである。

今、スローガンをいくら声が大きくても、実はある人が足で投票する。移民が非常に多くになった。過去には、中国の資産家が基本的に中国の経済の発展を自分の責任として、自分の資産は外国に移転しなかったが、現在は財

産を外国に移転して、どこに安全であればどこに資産を移す。また、過去には、エリートたちは外国に行ったら多数で帰国して自分の国を改造した。現在は改造が難しくなって外国に行って自分の専門がよく発揮できる外国に流れてしまった。

このような状況下に、中国は本当に愛国の危機にあった。輸入国が人材を入手して利益をもらって、輸出の国が人材は少なくなった。国際的競争の現実には無形な厳しさがある。

(3) 結 論

私はアメリカに行って、アメリカ人は自分の国を積極的に改造したい一人一人がいる。出会った人はある一定の教育を受けた、あるいは自分の事業を成功した人であった。みんなアメリカのこれがいけない、あれがいけないと批判して、それを改革するべきだと言っている。なぜならば、他国の人がアメリカに移民してきたが、アメリカが一番良いと。アメリカの新聞、さまざまなメディアが毎日アメリカの間違ったことを評判と批判している。私ははっきり覚えているアメリカの教授が、トランプを非常に反感して、トランプが大統領になったら移民すると言った。しかしトランプが大統領になった。彼はまだアメリカにいる。もし毎日トランプを罵って鎮圧される恐れがあるなら、彼は他国に行ってしまうのではないか。現在、国際化される愛国については新たな問題になって、結論にならなくなる。

終わりに

資中筠は幼児期からピアノの教育を受けて、その後、高校卒業時、清華大学時代、学業もピアノと一緒に成長した。今は、80代後半になった資中筠が中国の解放前と解放後、そして、文革の前とその後、中国社会科学院米国研

研究所の経歴と先進国の研究等を踏まえて、中国の改革開放40周年のまとめについて、率直に自分の観点と意見を提出した。彼女の思考は、将来への中国の発展のため、役に立てるのではないかと考えられる。筆者がこれから中国の国際的発展を祈ってやまないのである。

注

- (1) 資中筠（1930年6月から）、学者、翻訳家、中国社会科学院名誉委員、元中国社会科学院米国研究所所長、『米国研究』雑誌編集長。英語と仏語を精通し、国際政治と米国研究の専門家。人格と人望が高い「資中筠先生」「資先生」と呼ばれる。<https://>「資中筠」2019年1月24日閲覧（日本と中国には資中筠についての先行研究なし。本稿は中国語のみの資料で、筆者がまとめと翻訳したのである）
- (2) 「改革開放」とは1978年中国共産党11届3中全会で提唱した「国内に改革、国外に開放」「思想を解放し、事実を求めよう」、今日まで40周年を迎えた。<https://>「改革開放」2019年2月7日閲覧
- (3) 「1、政治経済観」の「(1) 誰が国の主人公？」と「(2) 真実の話の権利は？」は、<https://>「資中筠」2019年1月24日閲覧の資料を選んだ
- (4) 「(3) 階層の固定化？」は、<https://>「資中筠」2019年1月24日閲覧
- (5) 「2. 教育観」は以下の「(1) 教育の目的は？」と「(2) 教育と啓蒙は」と「(3) 独立の人格と自由の思想は？」と「(4) なぜ教育を受けるか」と「(5) 教育機構を作る目的は？」と「(6) 応試教育」は「人民網の83歳の資中筠」、「2013年8月23日資中筠『教育と啓蒙』」、<https://>「資中筠 教育」2019年2月13日閲覧
- (6) <https://>「資中筠」2019年1月24日閲覧。筆者はかつて「陶行知の芸術教育論」を研究していたが、思想の成長は芸術的思考とどう関係するかを興味があった。資中筠は幼少期から真面目にピアノを習っていて、87歳にも楽譜をしっかりと覚えた演奏がプロのピアニストではないが、今の改革開放40周年の言論は、彼女の思想が現れ、受けたピアノの教育とのつながりがあるかと考えられる。
- (7) <https://>「2018資中筠」2019年2月13日閲覧。

